

チュエルヌィシエフスキーの歴史哲学(I a)

武井勇四郎

チュエルヌィシエフスキーの思想活動は、おおまかに言って、四つの時期に区分けすることができる。第一期は1848年2月から1852年までの時期、——ペテルブルグ帝大の大学生生活の後半、時も時、フランス2月革命、6月蜂起の世界史的イベントから始まり、そのロシアへの反響ともみられる1849年4月のペトラシエフスキー団事件を経て、大学卒業後、郷里サラトフでギムナジウムの教職につき、再度ペテルブルグにジャーナリストとして出立する時まで、ロシア史上からみればクリミア戦争の勃発の頃までである。この時期は、専らチュエルヌィシエフスキーの西欧社会主義思想、王政復古期の歴史学、フォイエルバッハの唯物論の受容とゴゴリをはじめとするロシア・リアリズム文学の修学の時であり、いわば後に彼がロシアの思想界に登場して革新陣営の思想的ヘゲモニーを握って自由主義者に対して論陣を張るが、これはそのための思想的準備期に当たっている。なりよりもラジカルな社会主義者としてのチュエルヌィシエフスキーの姿が浮きでている、これが第一期の特徴である。第二期は1853年から1856年までで、博士号請求論文『芸術と現実との美的関係』をひっさげてロシア思想界に雄々しく登場した時をもって始まり、つづいて『祖国の記録』と『現代人』誌に参加し、『ロシア文学のゴゴリ時代概要』『プーシキン、彼の生涯と作品』『幼少年時代、トルストイの戦争物語』『レッシング、彼の時代、生涯、活動』等に健筆を振り、第二のペリンスキーとしてロシア文学・芸術評論活動に力を注いだ。歴史的にみれば、この3年間はクリミア戦争の3年間であり、その敗北をもって終って

いるのが特徴である。第三期は1857年から1862年までの5年間、クリミア戦争の完敗によって、専制・農奴制に起因するロシアの後進性が白日の下にさらされ、ロシア近代化および西欧化へのかけ声が一段と大きくなって、1861年の農奴解放を目差しての「上からの改革」が焦眉の問題として差迫った、それがため、急遽チェルヌィンシェフスキーは第二期の文芸評論活動から、土地・農民問題に方向転換をはかる。この時から「上からの」農奴解放を要請する改革＝自由主義派と、あくまでも農民の利害をまもろうとしたチェルヌィンシェフスキーとの熾烈なイデオロギー闘争が展じられる。彼はブルジョワ的改革に対峙させるに農民社会主義をもってした。この農奴解放をめぐるイデオロギー闘争のただなかで、彼の社会主義、人間学、「勤労者」の経済学の結実をみる、——『スラヴ派と共同体問題』『土地所有について』『農村生活の新条件について』『農奴解放覚書』『ランデブーにおけるロシア人』『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』『経済活動と立法』『迷信と論理規則』『地主農民の生活設計』『資本と労働』『哲学の人間学的原理』『「ミル経済学原理」露訳およびその評言』 檄『地主農民への同情者からの挨拶』『宛名なき手紙』等々である。しかし、彼の精力的にして不屈な闘いにも拘わらず、そして彼の意図に反して「上からの改革」は1861年に宣せられ、ロシアは西欧流の資本主義路線に乗って徐々に近代化に向う。1862年チェルヌィンシェフスキーはその唯物論とラジカルな政治観の故に逮捕され、つづいて牢獄につながれて、彼の現実的な思想・ジャーナリズム活動は停止を余儀なくされた。最後の第四期は、獄中でかの有名な、後にレーニンの組織論・戦術論の書名ともなった小説『何を為すべきか』をものすものの、彼にとっては悲惨そのものの四分の一世紀、1862年から1888年の郷里サラトフに帰還して永眠するまでで、牢獄と厳寒のシベリアで余生を送る。彼の活動は完全に圧殺されたにも等しかった時期であった。本論稿と統論はこの第一期を詳細に考察するものであり、追って第三期までの彼の歴史哲学の発展を論及する。

えてして青年時代の鮮烈な印象がその人の一生涯の思索や活動の内容を左

右し、おおかたにおいて、それらの方向進路をきめてしまうことが、ままあるものだ。青年の柔軟な、受容性に富む脳髓に、ある著書なり、政治的事件なりが生涯拭いがたい影をおとして、その人の社会観、人間観、一言で言えば世界観の大筋を形造ってしまうことがあるものだ。ラジカルな空想社会主義者としてのチュルヌィシユフスキーもこの例外にもれない。彼が大学生時代に奇くも遭遇した世界史的な政治的事件とこれまた遭遇すべくして遭遇したとも言える人類の記念碑的著作とが、こうも言えるなら、彼の思想と活動に座標を設定し、進むべき方向に初速度を与えているのであり、そしてその後に加齢されて行く彼の思想活動と実践活動は、この座標定位と初速度に大きく負って、しかもロシアの現実的な社会的・経済的運動の原動力によって推進されて進行するものであった。この意味で、チュルヌィシユフスキーの学生時代における座標定位と初速度形成はきわめて重要な働きをもっているもので、一考察に価するものである。先の第一期は1848年から1852年の5年間であるが、思想形成の実質からみれば、1848年2月革命から大学卒業年次の1850年までのほぼ3年間は、この座標定位と初速度形成に当てられていて、思想史上からみれば1848年の社会主義思想とヘーゲルの客観的観念論を人間学でもって解体していたフォイエルバッハの唯物論と王政復古期の産物である歴史学および歴史哲学とフーリエ主義の受容摂取からなっていた。この受容摂取の作業の有様は、チュルヌィシユフスキーが日記を恰も自己の思想形成の告白の日記として、突如 1848年5月から綴り始め、大学を卒業して郷里サラトフに帰るまで続けたその日記のなかに、克明に描かれているのである。本論稿と続論は主としてこの日記を素材にして、この作業を当時のロシアの知的雰囲気とロシアの伝統思想とを織り合せて詳細に分析し、合せて、チュルヌィシユフスキーがラジカルな社会主義者として誕生し、出立する雄々しい姿を描きあげてを主題にしている。

1848年。これはロシアの歴史にとっての年号ではない、これはフランス史の年号、否、それのみに限られない西欧全体の、否むしろ世界史の一時代を

劃する年号である。歴史の地平に自ら歴史を創る勤労者人民が抬頭し、共産主義思想が現実的運動として自己の年号を歴史に彫り刻んだ年である。2月革命、6月蜂起は、ウィーン体制の主謀者たる「神聖」ロシア、革命事業を「神聖」という保守の、否、反動の二字で塗りつぶそうと懸命になっていたロシアに再度革命の雷鳴として轟いたのである。上層支配体制側にとってはこれは最も恐るべき震撼の種であり、反面、専制・農奴制によって数世紀も西欧社会からとりのこされた「闇の王国」の思惟するインテリゲンチヤ——1812年のナポレオン戦争によって西欧近代の文物に触れてロシアの近代化を叫んだ1825年のデカプリストの反骨精神に鍛えられ、ニコライ I 世の検閲の暴圧と闘っていたロシアの目覚めたインテリゲンチヤ、このインテリゲンチヤにとっては、この革命は「闇の王国」の全天に射しいる一条の光、自国の暗闇をいやがうえにも識らせしめる稲光であった。奇しくも、当時最も西欧化していたペテルブルグの大学で学生生活を送っていたチェルヌィシエフスキーが、この雷鳴を耳にしたのである。血気盛んな、博愛心と正義心に篤い青年チェルヌィシエフスキー、地主的専横をいやというほど身に感じさせられていて、それに闘志を燃やしていたチェルヌィシエフスキーに、2月革命とそれにつづく6月蜂起が、跡かたも残さずに通りすぎるはずがなかった。自国ロシアの未来のあり方に思いを馳せていたインテリゲンチヤが、先進国で起っているこの政治的事件に無感動・無関心でありようはずがなかった、当時のロシアの思想家にしてこの事件に素通りした人は誰一人としていない。ゲルツェンとバクニンとは自らこの事件そのものに直接身を投じている、そしてこの事件の経過は兩人に色々な意味合いで、決定的な影を落しているし、またペトラシエフスキー団は、これを契機としてフォーエ主義を急進化させたのである。チェルヌィシエフスキーにとって、この事件は彼を社会主義者に仕立てたことにただ尽きるものでなく、ヘーゲル流に言えば、ロシアのインテリゲンチヤの意識を世界史の意識のなかに、つまり世界精神のなかに組みこむ結果をもたらしたのである。換言すれば、1848年はロシアが

意識や思想の上で西欧世界と緊密に結びつき、ロシアの自由主義者も革命的民主主義者も世界史の動向の中に棹さして物事を思惟せざるを得なくさせたのである。追って詳述するように、チュルヌィシエフスキーの農民空想社会主義とその歴史哲学は、ただ単にロシア的レベルの所産ではなくて、世界史的レベルに立ってのロシア的所産なのであり、ロシアの農奴制解体のベクトルと、西欧資本主義社会の階級的矛盾によるプロレタリアートの出生のベクトルとの特異な合力として産み出された特異な社会主義とその歴史哲学である。この後者のベクトルを形造っていたのが、言うまでもなく2月革命から、6月蜂起を経て、ルイ＝ナポレオン登場に至るまでの政治・社会過程である。この意味で1848年はチュルヌィシエフスキーにきわめて重大な影響をもたらしたと特筆大書しなければならない。

チュルヌィシエフスキーは、1850年5月15日付の友人M. И. ミハイロフ宛の書簡でこう書いている、——そもそもの1848年2月から今日のこの日まで、益々もって政治に首をつっこんだよ、ウルトラ的社会主义観の考え方にこりかたまつたよ、おれの主な崇拜者は、ルイ＝ブラン——おれは彼の後継者に属するな——、とブルドン、フォイエルバッハラだ、ルドリュ＝ロランも気に入りだ、一年半新聞ばかり読んだよ、数ヶ月というもの菓子屋〔当時、西欧の新聞がおいてあった〕へ入りびたりだった。そこで Presse をむさぼり読んだ、Siècle はつまらぬ、Débats はいやけがさす、しかし最初の一行から最後まで全部読んでいる、と。この書簡の内容を裏書しているのが、1848年5月末から綴られ1852年まで続いた日記であり、とき恰も2月革命が勃発し、憲法制定議会(1848年5月4日)が成立し、その中で6月蜂起が生じ、臨時政府の崩壊と「国民工場」の破綻をみて、ルイ＝ナポレオンが帝位について第二帝政が始まる1852年までの時期と時期的に対応しているのである。日記の内容からみてもフランスの政治の推移と密接不離であり、最も劇的であった6月蜂起とそれにまつわりついていた抜きがたい思想家・革命家についての多くの事や心象が綴られている。他方、この日記は交友関係の単

なる私事の告白といったものでなく、当時のロシアのインテリゲンチヤを把えていた思想的雰囲気を実に物語っている、いわばロシア思想状況の一断面とも評価され得る思想日記でもある。そしてこの日記は、先きのミハイロフ宛の書簡で述べられていること——ラジカルな社会主義者になったことと、ルイ＝ブラン、ブルードン、フォイエルバッハの三人を崇拝者にしたこととの有機的連関を見事に示してくれるのである。なるほどこの日記は、無論、死後に発表されたものである以上、当時の思想界に現実的力をもつものでない、しかし、先述した如く、座標定位と初速度形成がこの日記の中に克明に描かれている意味で、貴重である。言葉を換えれば、この日記は、1848年とルイ＝ブラン、^{ドクトリネール}純理派の歴史家ギゾー、フーリエのファランステールとペトラシエフスキー団事件、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』等々のもつ思想と実践とを一つに融合させている坩堝であり、これがこの日記の内実である。

スターリン時代の思考パターンに染ったソヴェトの哲学史家は、チェルヌィシェフスキーの思想を極力マルクス主義思想に近づけようと腐心したあげく、また、彼を生粋のロシアのすぐれた思想家たることを強調するの余り、マルクスが手きびしく小ブルジョワ社会主義者として論難した政論家から、チェルヌィシェフスキーを大きく切り離して、恰も彼らと無関係であったかのように扱う手法を用いた。例えば、ルクサンプル委員会のメンバー、ルイ＝ブランと憲法制定議会の議員に選出されたブルードンは、全然チェルヌィシェフスキーに影響をおよぼさなかったかのように扱うし、『ヨーロッパ文明史』『イギリス革命史』等の著者ギゾーの歴史哲学観の彼への役割を過少評価して、専らマルクス主義の三源泉のうちのフォイエルバッハとフーリエの彼への衝撃を過大視する。なるほどチェルヌィシェフスキーの人間学的唯物論は、フォイエルバッハのそれに大きく依拠しているが、しかし、フォイエルバッハから歴史哲学を導出することはそう簡単な理論的作業ではない、そしてフーリエは、チェルヌィシェフスキーにとって、ギゾーが崇拝者に数

え入れられなかったように崇拜者とはならなかった、少なくとも学生時代は。何故か、1848年6月蜂起の舞台上に登場したルイ＝ブランなる生きた主役の強烈な演出によって打ち消されてしまったからである。先きの友人ミハイロフ宛にだした書簡で掲げられている崇拜者、ルイ＝ブラン、ブルードン、フォイエルバッハ、そして1851年2月25日付の同じ友人に宛てた書簡のなかで掲げられた崇拜者文豪レッシング——この四人の西欧の人物は、彼の世界観を形成する際の抜きがたい特徴をなすものであって、決して偶然に四人の名が掲げられているわけではない。このことをまず特記しておこう。

ルイ＝ブランやブルードンを抹消するのではなく、むしろ、ルイ＝ブラン、ブルードン、ルドリュ＝ロランの言行、ギゾーの文明史のもつ歴史哲学、ヘーゲルの『法哲学』、フーリエの『四運動』、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』等々のものが、1848年から1850年にかけてどう有機的に融合してゆくのかの埒埒の様子を、チュルヌィシエフスキーの日記の中で追求して行く方が生産的である。このことによってチュルヌィシエフスキーの社会主義とその歴史哲学の座標定位と初速度がほぼ明らかになる。

チュルヌィシエフスキーが西欧事情に通じたのは、彼自身直接西欧へ渡ってその政治的社会的情勢に接したからではなく、この点スタンケヴィチ、グラノフスキー、ペリンスキー、バクーニン、ゲルツェンらと事情を異にする。因に、彼は1859年6月にロンドンにいるゲルツェンと会うために一度だけ外国に出ただけである。彼が西欧の事情に詳しかったのは、既にふれたミハイロフ宛の書簡からもわかるように、抜群の語学力、とりわけ堪能なフランス語力を駆使してのフランス諸紙のたゆまぬ読破によるものであった。彼が目を通した外国新聞は10紙に余るが、なかでも1848年に発刊され、2月革命後は王朝主義者（秩序党）の意見を代弁していたパリ日刊紙、“Journal des Débats”，当時文学・政治にわたって保守的傾向を示していた隔週間誌“Revue des deux Mondes”，7月王政時代保守的傾向を帯び、1848年に共和制を支持し、その後ボナパルチズムに傾斜した大衆日刊紙“La Presse”，1848年革

命前、反政府・立憲主義者の意見を反映し、革命後共和国を擁護した通俗紙“Siècle”，7月王政時代、ティエール、ミニエー、アルマン・カルルによって指導されたブルジョワ共和派の機関誌で、2月革命の準備に顕著な役目を果たし、臨時政府の閣僚をも出すが、しかしまもなく反動の立場にまわり7月王政の死刊執行人カベニャック將軍を大統領選に支持した“National”紙等であった。このなかでもチェルヌィシェフスキーは“Débats”には日課のように目を通してゐる。ニコライ I 世は即位と同時に1825年のデカプリストの乱で迎えられ、つづいて1830年のフランス7月革命に驚き、特高警察『第三課』を設け文相ウヴァロフを起用してギリシヤ正教・専制政治・国民性の官許イデオロギーを敷き、革命思想は勿論のこと自由思想という自由思想を一切禁じ、西欧から流入する進歩思想一切を禁書と検閲という防柵で塞ぎ止めて思惟するインテリゲンチヤに西欧の事情を知らせしめまいとした。更に1848年の革命に驚愕したニコライ I 世は、チェルヌィシェフスキーによれば、信じがたいほどの且つ理解に苦しむほどの荒れ狂った検閲強化によって諸思想を弾圧しようとした。俗に1848年から1855年の7年間をニコライ I 世の「検閲のテロ」の時代と称されている。しかしこういった「テロ」にも拘わらず、防柵のすき間を通して西欧の進歩的著作はロシアに流れこみ進歩的知識人の中でこっそり読まれ、人の手から人の手につぎつぎに渡った、しかし、西欧の諸紙はかなりルーズに大学図書館や人の集まる菓子屋（一種のカフェー）に置かれていた。チェルヌィシェフスキーはこの好機を見逃さなかった。革新思想の書物が禁じられていた時、“Débats”や“Mondes”や“Presse”等が保守的に自由主義的に伝えていたにしろ、1848年2月革命と6月事件のニュースのロシアへの流入は、それ自体一つの革命思想の流入、しかも生ま生ましい政治や歴史の実践的知識の流入に等しかった。チェルヌィシェフスキーが“Débats”はくだらぬと評していても、1年半も根気よく目を通したということは、その「くだらなさ」を越えて、西欧の事件の重大性を追跡せずにはいられなかった意味が、よくわかる。

約1ヶ月遅れの“Débats”紙を本格的に読み始めるのは1848年7月中旬からである、したがって逆算すれば6月24日の蜂起の直前に当たっている。すなわちこの直前というのは、2月革命が成功して7月王政のギゾー政権が失墜し、ただちにフロコン、ルドリュ＝ロラン、ルイ＝ブラン、労働者アペールをその構成員とする臨時政府が樹立し、つづいて労働者マルシュの強い示威がルイ＝ブランを議長とするリュクサンプール委員会を結成させて、労働者に「労働の権利」を保証することを約束させる、しかし、間もなく「国民工場」の無力さが曝露される、そういった時点である。一口で言えば、ルクサンプール委員会なるものが何ら事をなし得ず6月24日の蜂起を待つばかりの醜態ぶりを露呈した頃である。そして“Débats”紙自身は2月革命以降「秩序党」の名で呼ばれる王朝派や王朝主義者の方向に右傾化していて、チュルヌィシエフスキーによって「卑劣漢」よばわりされていた頃である。彼はまず6月蜂起直前の“Débats”紙の記事のなかに、憲法定議会の議員で左派の立場にあったピエル・ルルー（1798—1871）の「アフリカの植民地化」の記事を読み、ピエル・ルルーが人民（平民）の立場にいることを知り、また2月革命からフランスは物情騒然の世界であることも知り、これをロシアの現状と対比して、ロシアの長官どもが部下のために存在することを忘却に付すなら、目下フランスに起っているような事態に至り、支配者は被支配者から審判をうける羽目に陥るだろう、と書いている。これに加えてチュルヌィシエフスキーは自国ロシアはフランスに比して文物共に数段立ちおけていることを認め、自国を絶対視することの滑稽さを悟っている。チュルヌィシエフスキーが社会主義者ルイ＝ブランを知るのは、6月蜂起以後、つまりカベニャック將軍による鎮圧、日毎に増す反動のなかでであった、このことは反動とのコントラストなかでルイ＝ブランを浮き立たせる結果になり、チュルヌィシエフスキーにはルイ＝ブランは頭も思想も一頭すぐれた、平民（勤労者人民）の利害を代弁する闘士と映ることになる。そしてこのことは当然である。“Débats”紙はすでにその名のごとくルイ＝ブランに「論争」を挑

み、ルイ＝ブランのいう *Droit du travail* (労働の権利) なるものは、「国家が仕事をもたぬ人に仕事を与えるべきだ」という意味のことではないと非難し、失業者が何の仕事もしないで、国家から失業手当を受けとることを、そしてその数の増大していることを楯にとりて、ルクサンプール委員会の破産の責任をルイ＝ブランにとらせていた。たしかに、ルイ＝ブランの「労働の権利」は、実質上、6月蜂起前から骨抜きになっていた、こういったルクサンプール委員会の性格そのものや彼の「労働の権利」「労働の組織」「国民工場」の構想の実際の内容をチェルヌィシエフスキーは見極め尽していない。こうであればルイ＝ブランの主張は全く勤労人民の利害を表明するものであって、彼を非難する“*Débats*”紙は、自己の確信を声高にがなり立て、ピエール・ルルーやルイ＝ブランの社会主義的能力を伸ばしたり保証したりするものでなく、馬鹿げた時に皮肉しか吐けない「卑劣漢」である、と評されるのもまともであり、その保守的傾向にチェルヌィシエフスキーが強い不快な感じを抱いたのも当然の成行であった。

チェルヌィシエフスキーは一ヶ月近く“*Débats*”紙を読んで、つまり6月蜂起後の約1ヶ月迄を読んで、自分は益々、社会主義者たちの諸規定に信をおくようになったと記しているが、その諸規定とはルイ＝ブランの発言になる、“*chacun produit selon ses facultes et reçoit selon ses besoins*” (各人は自分の能力に応じて生産し、自分の欲求に応じて獲得する) といういわば共産主義のテーゼである。チェルヌィシエフスキーはこのテーゼを、生産力が増大し、私有制が厳密の意味で存在しなくなり、その時にのみ各人が常に自分の好みのものを十分に使用して、あらかじめ占有したり保持したりすることがなくなると解釈し、それには若干の期間を必要とし、その間所有制は悪い制度であっても受け入れるのもやむをえない、と述べている。この点で、プルーダンの発言、「キリスト教は *s'use* (消滅している)、所有は *s'usera* (消滅するであろう)」は200~300年先のことならともかく可能だが、いささか滑稽とみなした。チェルヌィシエフスキーはプルーダンをルイ＝ブランと並べて

崇拜者の一人に掲げている割合には、ルイ＝ブランほどに多言していない。周知のように、ブルードンは1848年2月革命以前に、『日曜礼拝論』(1839)、『財産とは何か』(1840)、『人類における秩序の創造』(1841)、『経済的諸矛盾の体系、貧困の哲学』(1846)を著わして純理論的活動に絞っていたが、1847年から2月革命にかけて行動・実践への転換を渴望していて、2月革命とともに書斎の共和主義者から行動の共和主義者に、批評から『人民の代表者』紙のジャーナリズム活動に移った。そして憲法制定議会の議員にも選出され、先きの発言を行っていた。チェルヌィシエフスキーが初めて知ったブルードンは、したがって、行動家、革命家、ジャーナリストとしてのこのブルードンであったわけである。ブルードンは6月蜂起について『人民の代表者』紙上で言う、私は不名誉なことには一顧だにしないかの誇り高き労働者階級に属していることを名誉とする、と。また『第三身分』の著者シェイエスの名言をもじって、生産者とは何か？ 無である、彼は何のであるべきか？ すべてである！ とか、資本家とは何か？ すべてである！ 彼は何であらねばならぬか？ 無である！ と書いていた、また憲法制定議会では、私が諸君と我々というこれら二つの代名詞を用いる時、私が私自身をプロレタリアートと同一視し、諸君をブルジョワ階級と同一視していたことは明白である、とまくしたて、国民軍に向っては、諸君の偽りの保護者たちから、仕事と信用とパンを要求せよ、と呼びかけていた。しかし、ブルードンはルイ＝ブランほどの信望と実力を議会ではもっていなかった。

ブルードンには1848年以前に発表した先きの数々の社会主義的内容の著作がある、ルイ＝ブランにも『労働の組織』(1840)、『10年史—1830~1840—』(1841)があるが、チェルヌィシエフスキーが彼ら二人のいずれかの著作を読んだ上で、彼が二人を信奉したのであろうか。先きにとりあげた友人ミハイロフ宛の簡書では、いずれのものも読んだことがないと告白している。この点を考え合せると、彼がルイ＝ブランとブルードンの理論的著作によって彼等二人に共感を見出したのではなく、専ら1848年の革命のなかで勤労者人民

の立場にたつ彼等二人の発言と行動に共鳴したもので、社会主義の理論的原理やその運動論に理解を示したことによるのではなく、かなり心情的、道徳的に共鳴し共感したものであった。この心情的・道徳的共鳴の性格が、チェルヌィシェフスキーにおいて破綻を来たす時が学生時代中に起る、この点を強く銘記しておこう。

1848年のロシア、これは西欧近代国家に遅れること数世紀であり、専制政治による暴圧のピラミット体制は依然として鞏固で、地主＝農奴の経済関係はゆるぎなかった。このような大ブルジョワジー、小ブルジョワジー、プロレタリアートの階級未分化のロシアの現実のなかに立っていたチェルヌィシェフスキーが、王政復古、7月王政、2月革命、6月蜂起、将軍カベニャック、ルイ＝ナポレオンと言った次ぎ次ぎに起るフランスの政治過程が、それぞれどのような諸階級の利害とからみ合い、それぞれどの階級の物質的経済的背景をもつものであるかを一つ一つ詳細に区分したり分析したりする能力を持合わせざるがたい。彼は王党派、小ブルジョワ共和派、急進派の色分けを経済的利害の面から行っても、それはおおまかなものであった、例えば、ルクサンプール委員会におけるルイ＝ブラン、ルドリュ＝ロラン、労働者アールらの微妙な違いを区別できなかった、このことをチェルヌィシェフスキーに要求することは不可能でもあり、また不当なことでもある。しかし、チェルヌィシェフスキーは被支配者（勤労者人民＝平民）が歴史の地平に抬頭し、彼等の思想的代弁者がルイ＝ブランであり、ブルドンであり、ルドリュ＝ロランであり、その他の憲法制定議会の議員であると大まかに評定したのである。この点で、2月革命の立役者にして臨時政府の外務大臣、『ジロンド党の歴史』（1847）と『2月革命史』（1849）の著者ラマルチース（1790～1869）と、1848年の憲法制定議会の議長コルムネン（1788～1868）もロシアの血気はやる青年には立派な社会主義者に映り、彼等に反対する連中は彼等の100倍以下であると評定される。この当時、ラマルチースは実は6月蜂起の鎮圧者カベニャックとつながり、憲法制定議会がルイ＝ボナパルトの選出の

下準備をしていたのであるが、これらの微妙な政治過程は彼には、勿論、理解できなかった。

ミハイロフ宛の書簡からもわかるように、チェルヌィシエフスキーを政治に深入りさせ、彼の政治観を形造って行くものは1848年2月革命以後のフランスの政治過程の推移なのである。この頃、彼はゴーゴリの『検察官』『死せる魂』、レールモントフの『現代の英雄』を読んで、ゴーゴリとレールモントフはえがたい偉人と評価している、が、しかしこの両者の文学がいかにもリアリズムであっても、この作品から政治観を形成することはできまい。『祖国の記録』誌から得たものは、文学を通じての間接的な社会批評（ロシア・リアリズム）であって、政治的見解ではない、したがって、保守的傾向をもつものであれ、“Débats”紙こそチェルヌィシエフスキーの政治的見解を形成するにあずかっておおいに力あったとしなければならない。専らこのフランスの政治的趨勢を追っていくうちに、フランス一辺倒になり、その文物に心酔するまでになる、——ロシアは尊敬おくに全くあたわぬ、ほとんどロシアについて考えてもみない、西欧に敬意を表す、我国ロシアは西欧と全然比較にもならない、西欧が大人で、ロシアは子供だ、ロシアは西欧の残飯整理だ、ロシアは別の原理から発展した、ロシアには階級闘争はいまだなかった、始まりかけたばかりだ、と日記に表白されている、そして彼はロシアの後進性を西欧の先進性に照して見ざるを得なくなった。当時、俗に言う^{ザパトニキ}西欧派のインテリゲンチヤは皆、西欧の文物にたいして強いコンプレックス意識を抱いていたことは否めない事実であり、あらゆる点において亀鑑を西欧に求めた。「西欧」、この文字は「進歩」と同文字であり、「ロシア」、この文字は「暗闇」ということと同じ意味であった、チェルヌィシエフスキーがギゾーの『フランス文明史』（1823～1836）を読みかけて、歴史は進歩である、と信じた場合、そのことは、ロシアが西欧のレベルまで進歩しなければならない、ということをも意味したのである。彼が政治観や歴史観においてフランスにどれほど魅了されたかは、第三期の諸論文から十分にうかがい知るこ

とができる、——『カペニャック』『ルイXVIII世とシャルルX世治下の党派抗争』『ルイ＝ナポレオン時代のフランス』『7月王政』等々。彼が学生時代に読んだギゾーもフーリエもフランス人だ。ついでに言えば、ロシアが当時西欧から学ぶべきものは、政治、歴史と社会主義に関してはフランスから、哲学に関してはドイツから、近代議会主義に関してはイギリスからであり、文学のみ自国ロシアからであった。

チェルヌィシエフスキーがルイ＝ブランの熱烈な信奉者になるのは、「各人は自分の能力に応じて生産し、自分の欲求に応じて獲得する」といった共産主義的テーゼだけにつきるものでなく、ルクサンブール委員会でのルイ＝ブランの演説——「人民が議会より上位にあり、したがって議회를指揮する権利をもつ」という18世紀の主権在民の政治理論と、ルイ＝ブランがコンディエールらと共に6月事件の審査委員会で弾劾裁判にかけられた時、ルイ＝ブランが雄々しく反論した演説とである、——「えい、諸君、諸君、諸君の掌中に権力と共和国の言葉があった、その点に諸君は問題があるようにお思いのようだ、——こんなこと問題にならない；問題は下層階級が、法の前でなく、事柄の必然性の前で、自分の奴隷状態から解放されることにあるのだ、彼等が食べ、飲み、嫁を迎え、子を養い、父母のめんどうを見、教育を受け、夫たちを見殺しにしたり絶望におとさないことにあるのだ、妻たちが自分の身を売らぬことにあるのだ、〈この裁判は不合理の極みだ。〉自由だ自由だとわめき立てる諸君はすかぬ、——こんな自由は制限付きのものだ、この言葉を吐いたとて法に記入したとて何ともならぬ、不平等を述べている法を廃棄しても旧態依然だ。人民の十中八九が奴隷でプロレタリアである社会秩序を廃棄するものでない。皇帝がいるか否か、憲法があるか否か、これは問題でない、問題は或る階級が他の階級の血を吸い上げないようにする社会的諸関係なのだ。〈そしてこの裁判は何という卑劣きわまりない欺瞞だ。〉我々は諸君の判決を要求しない、諸君は裁判官でない。Vous ne préjugez rien. / (諸君は物事の子判はできないのだ。/)——何たる下劣——、言葉の遊びだ、

マスクをかなぐりすてているのだ。」

このような演説を見たとき、血気にはやる青年チェルヌィシェフスキー、プガチョフの農民叛乱の謀叛気とデカプリストの反骨精神が心底深くに刻みつけられていた青年チェルヌィシェフスキーが、自分がテロリストにして極左の共和主義者の追従者で、れっきとした革命家になったのではないか、と日記にしるしているのも理解がいく。これは心情的にルイ＝ブラン流のラジカリストになったことを示している。そして彼はこの心情的・道徳的ラジカリスト、極左の共和主義者の立場からフランスの反動化を追跡してゆくのである。

憲法制定議会はカベニャック 将軍 (1805~1857) を起用し、彼に6月蜂起を鎮圧する全権を委任した、彼は叛乱者や労働者を次ぎ次ぎに市街戦で殺戮し、逮捕、死刑、流刑で完全に鎮め、つづいて6月事件の審査委員会を設置し、オディロン＝バローを委員長において、ルイ＝ブラン、コンディエールらを労働者の示威運動の先導および共謀のかどで弾劾裁判にかけた。これを知ったチェルヌィシェフスキーは、大変な反動だ、すでに2月から大きく後退している、えらいことになった、と憤慨した。臨時政府の閣僚11名中、ルドリュ＝ロランは中小商工業を代表する小ブルジョワ共和派でルイ＝ブランとアルベールらと一線を引いてはいたものの、ルイ＝ブランとコンディエールらを弾劾裁判にかける審査委員会の行動を不当であると主張した、この点で、チェルヌィシェフスキーは彼を立派と評している。また、6月蜂起の鎮圧者にして、弾劾裁判の首謀者を、とんまにして馬鹿正直者、狡猾な野心家、愚鈍によってフランスを鎮め、社会悪を治療できない輩と評し、ルイ＝ナポレオンの大統領就任後、秩序党の首領となった王朝の反対者オディロン＝バロー (1791~1873) を、政治的偏見によって盲目になった人と同じく、卑劣にして不誠実に振舞った輩と評した。ルイ＝ブランとコンディエールを裁判した審査委員会は、1793年のジャコバン党の恐怖政治やギロチン政治を彷彿とさせるものだ、調査の任務を怠り、すべきでないことに深入りし、追求すべきことを追求しないで中傷と誹謗をこととし、無根拠を証拠にして弾劾したの

だ、とチェルヌィシエフスキーは断じた。しかし、このような反動が当時自然の勢いとなったため、資金の裏付けもない「国民工場」によって労働者を瞞着し、裏切り、ただ時間をかせいでいるにすぎない否定面は、チェルヌィシエフスキーの眼には映じてこなかった。学生時代ではルイ＝ブランの政治的誤謬もブルードンの欠陥もわからなかった、彼の崇拜者を批判にかけるのは第三期においてである。

心情的に、あるいは道徳的にラジカルな共和主義的社會主義者になったことは、政治理論や階級闘争の体験によって強くかためられてなった社會主義者とは違って、非常に脆い面を露呈することを余儀なくされる。このことは6月事件の約3ヶ月後の1848年9月18日の日記に示されたチェルヌィシエフスキーの政治観に見事に現われた。この時分はちょうどルイ＝ブランとコンディエールが審査委員会にかけられた直後にロンドンに亡命を強いられ、フランスの反動が本格化した時であって、チェルヌィシエフスキーの動揺はかくせない。彼は言う、——共和制は成長した人間に本質的に合致する唯一の政体で、国家の最終形態である、この政治観はフランスから得たものだが、もとをただせば、或る階級が他の階級を支配するほど有害なものはない、という往時からいっていた自分の根本観と合致したものである。貴族制は少数者が多数者を支配するためのもので自分の博愛の思想に合致しない増悪すべきものだ、と。チェルヌィシエフスキーはルイ＝ブランの言葉をかりて自己の信念を表明する、——諸君は平等をお望みである、が、しかし、弱き人間と強き人間との間に平等があろうか。片や財産があり、片や財産がないのに。片や知識を申し、片やそれを申しえてないのに。しかも、諸君が両者の間に闘いをさせてみたまえ、勿論、弱きもの、持たざるもの、無知なるものが奴隷になるにきまっている。ルイ＝ブランは独裁や君主制を認めたとは思われぬのに、チェルヌィシエフスキーは唯一の、現実的な良い政体は、ダイクタートル独裁か、それとも世襲無制限君主制(絶対主義)だと思ったのである。チェルヌィシエフスキーによると、この政治制度は、第一に、下層階級(一般

に被抑圧者、土地耕作者、労働者)が必要とする裁判の保証、租税の軽減、社会生活の庇護と彼らの利害の擁護を目的とし、すべての階層すべての人にたいして博愛を貫ぬく全階級の上に立つ政治制度であり、第二に、下層階級と上層階級との形式的でない実質的な、未来の平等の実現に、また下層階級を上層階級に高めることに全力を尽す義務を負う政治制度である。なるほどこの無制限君主制を真に平等な未来社会を容易に誕生させるための一時的な手段とし、行く行くは消滅するものとしたが、それにしてもこの君主制はかなり長く続くとされる、なぜならば、彼によれば、社会諸関係や社会的通念や習慣が容易に改造されて、一時代では地上に平等と楽園が創り出され得るのでないからである。彼はこの例としてピョートル大帝の如き啓蒙君主を念頭において社会改良を行なうて行こうと考えていた。これは彼が絶対君主に人類一般のための「徳性」と「博愛」とを要請ないし期待し、諸階級間の和解的妥協をこととする甘い幻想の政治観に尽きるものである。チェルヌィシェフスキーが心情的に道徳的に《社会主義者》になったことと、この甘い政治的幻想とは無縁ではなく、むしろ「心情性」と「道徳性」に由来する社会主義であり、そしてこのことはとりも直さず、彼が貴族制、絶対君主制、独裁制、共和制等の政治形態とその階級的な性格についてはぼんやりした意識しか持たせていなかったことを物語るものである。これに加えて、彼自身が牧師の子として育てられ、幼い頃から培われた宗教的「博愛」観が、この階級調和の政治観を裏打ちしていたものと言える。

そこでこの頃の彼の宗教観について触れておこう。キリストが神であり、受難し、復活し、奇蹟をなしたことを彼は信じてやまないが、時代の推移と共にキリスト教の概念も完成して行くものと見て、Neologism (新教義)や合理神学に少しの異論も唱えず、むしろパスカルとピエール・ルルーをキリスト教を現代化させた人として評価している。チェルヌィシェフスキーのキリスト教思想の解釈によれば、この思想の要は博愛の観念に尽き、これは永遠の普遍性をもつが、しかし、この観念はいまだに個別的な学問や諸理論に適用

されておらず、ましてや実践においてもそうであって、完全に展開されていない。実践における完成こそ、すべての諸関係においてと同様に無限であって、これを通して理論における無限な完成も可能である、何故ならば理論は自ら完成しながら実践化され、また逆でもあるからである。何故なら、この博愛の観念(精神)は、彼にあっては、国家の要人であろうと、私的な人間であろうと、すべからず人間の諸行動と諸理論を支配するキリスト教的道徳命法であり、この命法に、社会主義を含めたあらゆる諸問題が服さなければならぬからである。こういう考え方には、当時、カトリック教と社会主義を結びつけてジャコバン党やテロリストに栄光を与えていた『議会史』の著者 Buchez (ビュシェ) と Roux (ルー) の言う、「神の王国を地上に探せ」という、いわばカトリック的共産主義とピエール・ルルーのキリスト教的共産主義も作用していたとみられる。しかし、チェルヌィシエフスキーが、『貧窮絶滅』(1846)の書を書いた「馬上のサン＝シモン」たるルイ＝ナポレオンを絶対君主として念頭においていたかどうかは、定かでない。ところで「博愛」精神という人類的な一般的道徳価値規準が、一方において、人類の平等思想へつながるフランス空想社会主義者の価値規準になるが、他方、否定的に作用すれば、チェルヌィシエフスキーの先の幻想、つまり、ツァーリに恩恵と深慮を期待する甘い幻想にもつながる代物である。ロシアにおいて長いこと農奴制の頂点とギリシャ正教の頂点とは同一物であり、この意味で皇帝ツァーリは大司教でもあった。したがって神・キリストに救いを求めることは、皇帝に慈愛を願うことと重っていた。農奴制の重圧のピラミットの底辺にあえていた農民はいうまでもなく、インテリゲンチヤですらツァーリに対するこの二重うつしの偶像崇拜観をいただいていたのである。皇帝ニコライ I 世は文相ウヴァロフを用いて「ギリシャ正教、専制、国民性」が三位一体であり、ちょうど鼎(カナエ)の三脚であることを世に説いたのである。これが当時の支配層のイデオロギー、教育理念であった。牧師の子として生まれたチェルヌィシエフスキーが、キリスト教のもつ博愛思想を、すんなりと無制限

君主(ツアーリ)の政体に結びつけて、それを疑としないことが、以上のロシアのイデオロギー風土に由来するものであることがよくわかる。鼎の三脚が互助の關係にありそのうちの一脚でも折れれば、全体が横転するものであるとの理解に彼が達するには、もっとほかの知的・実践的作業が必要であった。

しかし、政治体制の階級的性格の無理解に基づく彼のこの無制限君主制の幻想は、約1年半後、即ち彼が大学生活の最終講義を迎えて卒業試験の準備にとりかかり始めた1850年1月20日——この日はまた大学の学生運動か何かの罪に問われて逮捕・拘留された同じ日に当る——に手きびしい自己批判に付されているのである。では1848年9月18日の無制限君主制の幻想から1850年1月20日までの1年半にいかなることが生じたのか、それはひとまず措いて、この自己批判の内容を先取りして詳述しておこう。

1年半ほど前の政治的見解を、チュルヌィシエフスキー自身回想してこう記している、——絶対主義体制(無制限君主制)を民主主義的精神で活用すれば、ロシアの専制と、人民大衆の利害を護る政体との間にあるすべての移行的状態を免れて、政体は法的にも実質的にも土地耕作者+日雇労働者+労働者の、つまり最下層階級の掌中のものとなり、人民の政体に無理なく移れるものと考え得たのは実は自分が絶対主義を、上層階級が下層階級を抑圧する貴族制の対蹠物と見做したからである、と。チュルヌィシエフスキーはこの見解を大変な誤りであるときびしい自己批判に付する、つまり、まず絶対主義は貴族制の対蹠物であるどころか、君主制と同じく身心共に貴族制ヒエラルヒーの完成物、即ち、貴族制という円錐体の頂点であって、絶対主義というこの頂点を払いのけても円錐体という秩序体制(官僚制、専制、農奴制のピラミッド体系)が残り、問題は少しもあらたならず、依然として従前通りである、と。こうして、チュルヌィシエフスキーは、ツアーリ=無制限君主(頂点)が人類の幸福という博愛的立場で下層民に庇護を与えるという、いわばロシアの農民全部が抱いていた虚偽意識から大衆が解放されること、そしてこの大衆自身のもつ偶像崇拜意識こそが革命意識への最大の障害物で

ある以上これを払拭すること、——これこそ革命にとっての焦眉の問題であるとし、1年半前の幻想を根柢から吹きとばしてしまった。

彼はまるでルイ＝ブランの演説のように日記の中に自己の政治観を表白している、——「破滅せよ、早ければ早いほど良いのだ。心の準備のない人民に自分の権利を行使させるのだ。戦闘の時に人民はすぐ心を決めるだろう。奴等が倒れないうちは、人民は覚悟できない。奴等が、中間階級においてすら、その知的発達の極めて大きな障害の原因なのだ、奴等が中間階級をだしに使って下層階級を完全に抑圧し吸い尽しているのだ、この下層階級のなかに、自分が人間的権利をもって人間であるなどと悟れる可能性はこれほどもない。ある階級による他の階級の抑圧を始めさせておけ、そうすればその時に闘いとなろう、その時に被抑圧者は現存秩序によって抑圧されていることをいやというほど知るであろう。別の秩序の下では抑圧されないことも悟るであろう。人民を抑圧しているのが、神ではなく、人間どもであることを理解するだろう。奴等に、公正な裁判も、何事を期待しても無駄だと知るであろう、奴等抑圧者の中には下層階級の肩をもつ人は一人もないことを知るであろう。現今では、人民はこの抑圧者の首領(ツァーリ)を自分の味方だと考え、聖者と考えている。しかし聖者がいなくなったって、こんな奴等はいなのだ、卑劣漢、収賄者、強奪者、残虐な圧制者、強欲漢、放蕩者、——奴等どもも、首領もそうだが、諸君のなかにだって、自らの階級を我々の階級に切り換える人なんて誰一人いないのだ、諸君に反対し、我々に賛成して、心底から確信をもって利己的目的を棄てる人なんかいないのだ。……自分の確信をとことんまで推しつめて、無政府(アナキー)が上層よりも下層にとって一等すぐれているものだとする極端な結果に走る人はいないのだ。無政府にあっては、非人間的諸関係はどこにもあり得ないのだ。自分が良い人間かどうか、善良な人間かどうか、ということはどうでもよいことだ、その時は自分を人間と考えることだ、自分の傍に他の動物犬がいる。無論、犬はいつまでたっても犬だ、犬は人間になれない。自分が犬を打つかどうかはどでう

もよい事だ。犬と自分とを正当に比較なんかできるものか、これが可能かを考えることは馬鹿らしい話だ…」ここには、絶対君主が博愛の精神で下層民に平等をほどこすという「博愛主義的」社会主義者チェルヌィシエフスキーから、偶像崇拜という虚偽意識の解除は戦闘においてのみ可能であり、とりも直さずそのことによって階級意識の昂揚が革命の起爆力になり、かつ階級闘争こそ歴史をつくり変える力であると理解しているところの、「急進的」社会主義者チェルヌィシエフスキーに、変貌している彼の姿がまざまざと見られる。階級協調主義的博愛的政治観からこの階級闘争的政治観への一転、つまり従前の政治観の自己批判が一体いかにして可能であったのか、何をしてそれを可能ならしめたのか？ 1848年9月18日から1850年1月20日の約1年半に、一体何が介在しているのか、彼はこの期間に何の試煉にたえたのか？ この発問への解答こそ、彼の社会主義の座標定位と初速度決定の解明となるので、決して見逃がし得ないものである。ルイ＝ブランとブルードンの言動によって心情的に社会主義者になった時期からこの自己批判に至るまでの間こそ、19世紀40年代の人類の総実践と19世紀初頭から40年代までに至るこれまた人類の理論的総遺産とが、一つの坩堝のなかでダイナミックに融合する内実豊かな、彼の学生生活において最も密度の高い期間なのである。論点を先き取りして簡単に述べれば、この期間には、カベニャックの反動化にもめげずルイ＝ブラン、ルドリュ＝ロランの味方である共和派擁護者たちは、国民議会選挙では社会主義的共和派ラスパイユやカベーに多数の票を投じ、そして彼らは議会ではフランス大革命時代の山岳党に倣ってモンタニャールと称して氣勢をあげた。またフランスの革命精神はベルリン、ウィーン、ハンガリーにも波及し、いわばヨーロッパの全天が革命の稲妻と雷鳴で満ち、そしてこの雷鳴はフリーエ信奉者でかたまっていたペトラシエフスキー団全員逮捕の事件を、それこそチェルヌィシエフスキーの身边で、惹き起きた。他方、彼はフランス王政復古期の二大思想、フランス空想社会主義と純理派の歴史学、つまりフリーエとギゾーになる諸著作の読書に没頭し、合せてドイツか

らは、一生涯私淑したフォイエルバッハの『キリスト教の本質』を手にしたのである。そしてゴーゴリの『死せる魂』、レールモンツフの『現代の英雄』、レッシングの『賢者ナターン』と『祖国の記録』誌を読み耽って批判的リアリズムを身につけたのである。これらすべてのことが一つの渦中のなかで融合してアマルガムとなった。

フランスの2月革命、フランスの6月事件、フランスのルイ＝ブラン、フランスのブルドン、フランスのルドリュ＝ロラン、——すべてフランスに関係することである。政治と革命の国フランスは、いつも西欧に眼を向けていたロシアの青年に甚大な関心を惹き起した。およそフランスの政治革命はフランスの歴史そのものであり、逆にフランスの歴史は革命の歴史であって、19世紀のフランスの史家で革命を主題にしないで名を博した史家は少ない。——ドローズ『革命を防ぎえた、あるいは導きえた時期のルイ16世時代』(1839)、ピュシエ/ルー『フランス革命の議会史』(1833)、ミシュレー『革命史』(1847~1853)、トックヴィル『旧制度と革命』(1856~1859)、キネー『キリスト教とフランス革命』(1845)『革命』(1865)、ラマルティエヌ『1848年の革命史』(1849)、ルイ＝ブラン『10年史』(1841~1845)『フランス革命史』(1847~1862)、ティエール『フランス革命史』(1823~1827)、ミニエー『フランス革命史』(1824)等々枚挙にいとまない。これらのもののいくつかをチェルヌィシエフスキーは彼の思想活動期中に貪り読んだ。確かに6月事件は、彼が革命と歴史、歴史と人民、社会進歩と人民の闘争等の関係の問題に注意を向けるきっかけをつくった。とりわけ、彼はフランス大革命、7月革命、2月革命、6月事件を起したフランスの歴史に多大の関心を示して6月蜂起後のフランスの反動化を追跡して行くなかで、王政復古期の純理派^{ドクトリネール}の歴史家ギゾー(1787~1874)の歴史講義の著書にでくわした。当時、ロシアにおいてこの歴史家ものは検閲の対象外にあつたらしく、大学の図書館で自由に読まれていた。チェルヌィシエフスキーの歴史学への興味は、終生続くが、

ともかくギゾーの『フランス文明史』で始まっている。後に彼は牢獄ヤシベリアで、マコーレー『イギリス史』(1848~1855)やノイマン『合衆国史』(1863)やゲオルグ・ウェーバーの大著『教養階級のための世界史』全11巻を翻訳するという大事業を行っているが、その源はギゾーの歴史学書によって喚びおこされた関心である、またギゾーのものは2月革命前のフランスの歴史や社会史を青年チェルヌィシェフスキーに教えただけでなく、歴史方法論ないしは歴史哲学をも教示したという意味で、ギゾーは彼にとって極めて重要な人物であった。事実、チェルヌィシェフスキーは学生時代から第三期の1857~1861年の最も豊かな活動期中でも一時もギゾーから眼を離していないし、ギゾーの歴史哲学観が、チェルヌィシェフスキーのそれにかかなりの影響を及ぼしていることは否めないのである。なるほど、学生時代彼はギゾーを信奉者に数え入れることはしなかったが、彼にとってルイ・ブランが社会主義者中の大立物で、フォイエルバッハがドイツ哲学の大御所で、フーリエが農業共同体の最初の発想者とすれば、ギゾーは歴史学と歴史哲学の錚々たる学者としての地位を占めていた。この意味で、ギゾーにたいする学生チェルヌィシェフスキーの態度と評価について論及しておくことは必須である。

もともとギゾーはティエール、ミニエールと並んで1820年代に純理派の歴史家として出発し、『代議制の歴史』(1822)、『フランス史試論』(1823)、『イギリス革命史』(1829~1836)、『近代史講義』(「ヨーロッパ文明史」「フランス文明史」(1823~1836)を著わし、右の絶対主義と左のジャコバン党の中間に挟まる立憲王政の立場に立って中産階級の利害を代弁した。1840年から2月革命まで内閣を組み政治家として7月革命後のフランスを治めるが、革命によって失脚しイギリスに亡命し、再度歴史家に逆戻りするという奇数の運命をたどった。チェルヌィシェフスキーは政治家としてのギゾーと、歴史家としてのギゾーの両面に関心を示すが、まず最初にギゾーは歴史家、『フランス文明史』(1823~1836)と『イギリス革命史』(1829~1832)の著者として立ち現われた。『フランス文明史』の読後感として、専制政治は、カール大帝とピョ

ートル大帝がそれを用いたように、現にある善に悪を接木するとき悪い道具であると日記に書き入れているが、しかし、ロシアの専制と西欧の絶対主義との区別はついていない。しかし、つづいて『イギリス革命史』、Barante (バラント) の『ブルゴーニュ公家の歴史』(1824~1826) や Bekker (ベッケル) の『世界史』(1801~1805) の露訳を併読して行く中に、チェルヌィシュェフスキーは人間歴史の一般的運動の知識を徐々に増して行き、ギゾーからはこういうことを学び知った、——人民の歴史は当初、万人が自由で社会のないものであったが、人は無秩序に気付いて、無社会の無秩序から抜けでる手段を探しだす、ところで、悪というものは自分の内に一種の解毒剤をもつのが常である。一面では人と人との不平等を産みだし貴族制をつくり、権力を産みだして、社会の出現と相成るが、反面、この社会のなかでの人々の衝突、反目、権力の強化と不平等が従前の自由や平等を大きく剝奪したものであることを気づかせる。これは対立した志向が始まることを意味している一種の解毒剤である。権力と不平等が進行すれば、それらを弱める働きが現われ、社会の各人がすべて好きなことをするを目差す。社会の当初の状態は次の状態に似かよるけれど、唯一の êtres réels (実在の本質) たる人間は少しも同じものでない、つまり、前者では部分的 *volontés* (意志) をもった人々はしたい放題のことをするが社会は無い、後者では社会はあるが、*volonté réglée* (規制的意志) の人間に成長しているので、人々は何でもなし得るが社会を破壊することは何一つない。ギゾーのこの見解にはルソー流の一般意志と個別意志の見解に加えて、抽象的形態をとってはいるが歴史の弁証法が流れている。この点にはチェルヌィシュェフスキーは異論を出していないが、社会の状態が大きく前進すれば、それだけ圧迫するものがそれだけ少なくなり、秩序が破壊されないためにも、また全体の福祉(富)が部分意志に有害に働かないためにも、社会権力がそれだけ小さくなければならない、とギゾーの見解に補足を加える。もともとギゾーの『イギリス革命史』はチャールズ I 世の即位から始めて近代イギリスの憲法のための闘争を叙述した

ものであって、ギゾーはイギリス革命、つまりクロムウエルの清教徒革命の特長を、君立政に圧倒された政治上の自由の回復の闘争、専制的権力の廃絶の闘争と規定している。しかしギゾーはこのイギリスの革命は、フランスが平等を求めて闘ったのと違って、宗教上の革命と政治上の自由（諸々の権利の宣言と議会制度、立憲制）との融合で、本質は自由探求であったとした。これらのギゾーの見解に対してチェルヌィシエフスキーがどんな態度をとったかは定かでないが、政府や僧侶が、改革や蜂起を指導すべきであるのに、不決定で偽善的な態度で改革に臨んだとしているところをみると、彼は上層権力に甘い期待を抱いていたとみることができる。ちょうどこの頃はチェルヌィシエフスキーが無制限君主制の政治観を表白した時期である。ギゾーが、君主権 *souverainte* は人民に帰属するものではなく、法に (*au droit*)、正義に (*à la justice*) 帰属する、と述べれば、チェルヌィシエフスキーも同調したりし、また、人口の大部分が教育を受けていない時には、普通選挙権を与えることは時期早尚であるというギゾーの制限選挙制の見解にきっぱりとした反対態度をチェルヌィシエフスキーは取っていない。反面、彼はギゾーの歴史観を批判もする。ギゾーは、普通、歴史というものを初めて制度や組織の変遷として考察した史家として高い評価をもっているが、チェルヌィシエフスキーにとってはこの点が人間不在に見えた。彼は言う、ギゾーの言葉——「偉大な事件は、断じて、勝手気儘な動機で行なわれるものではない」を、「偉大な事件は断じて、偉大な事件のどの一つも、断じて、人類の光とならぬような人によっては行なわれぬし、生じもしないものだ。知性界や社会で重要な役を演ずる人のみが歴史をつくる」という言葉で取り替えるべきである、と。チェルヌィシエフスキーは歴史の原動力は生きた人間とみて、ギゾーの政治制度、社会構造、事実としての制度のみを画く、未来への展望を示さない人間不在、偉人不在の歴史に満足できなかった。彼はフーリエの『四運動』やヘーゲルの『法哲学』を一応読んだ後で、歴史学と人民の状態についてこう述べる、——歴史学は、人民やある階級の諸行動、由

来、諸状態、諸構成、生活の状態について物語ることにある、歴史学の仕事は、この人民と状態とを結びつけることであって、どうして状態から志向と行動が生じ、どうして諸行動や諸事件が人民のある状態から他の状態に導いたかを明示することである、と。

このチェルヌィツェフスキーのいわば人民主権的な歴史観と、無制限君主制および制限選挙制との同時的承認、およびそれら両者間における彼の動揺は、王政復古期の立憲王政の理論的代弁者としてのギゾーの政治観と強くつながっているものである。純理派の理論家ロワイエ＝コラルルは、権力の所在を人民にも国王にも求めず、その意味では、人民専制も絶対君主制も認めず、人民と国王の契約ともみられる「憲章」のなかに求めた。同様に、ギゾーも主権を一定の集団、人間のなかに求めず、理性のなかに求めた。普通、王政復古の7月王政は、ルイ＝フィリップを王としたブルジョワ王政といわれ、大銀行家、金融貴族と大ブルジョワが右手で正統復古主義を抑え、民衆の政治権力を唱え政治革命と社会革命を結合しようとしていた共和主義を左手で抑えて抬頭していたのである。これが「ルイ＝フィリップ・ギゾーの支配時代」の特徴なるもので、秩序原理と自由拡大との調和と妥協、換言すれば近代的王権と中産ブルジョワジーの自由要求との調和であった。この点でギゾーは制限君主制（立憲君主制）を支持し、その理論的根拠を18世紀啓蒙主義の理性に求め、その理性の表現としての「憲章」を擁護し、他方共和主義を抑えるために、選挙権者は200フラン以上の直接税納入者、被選挙権者は500フラン以上の納税者に限るという、いわば制限選挙制の執拗な推進者であった。この意味でギゾーは、理論的にも実践的にも人民主権と絶対王権の間をとったのである。因にギゾー政権当時の政治地図をみると、こうである、——政府反対派、王朝的反対派のオディロン＝パロが最右翼に、ついで金融貴族・大土地所有者の利害の表明者ギゾーが右翼に、『ナショナル』紙を根城に自由主義的共和派の勢力を集めていたティエール、ミニエーが中央に陣どり、革命的共和派、小ブルジョワ的急進派のルドリュ＝ロランが

『レフォルム』紙を足場に左翼に、リヨンの暴動以来労働者の味方立っていたプルドン、「国民工場」の提唱者ルイ＝ブラン、労働者の独裁政権の樹立をめざして秘密結社『季節社』を中心に地下活動していた革命家ブランキ、デザミらが最左翼に論陣を張っていた。こういうなかで、ギゾーの果たす役割は、まず一方では過激派王党派（ウルトラ）に反対し、他方では革命的共和派に反対すること、即ち、絶対王権に反対し、同時に人民主権に反対して、君主制と革命の妥協をはかることである。立憲王制と制限選挙制——これがギゾーの政治理念であった。制限選挙制こそ庶民・労働者と貴族・大ブルジョワジーとの妥協の現われといわなければならない。このようなギゾーの事情をチュルヌィシエフスキーがどの程度に認識していたかは確定困難であるが、彼が無制限君主制と人民主権との間を動揺するのは、一つにはこのギゾーの政治観そのものに由来していることは否定できない。おそらくチュルヌィシエフスキーがこのギゾーの政治観に左右されてのことであろうか、貴族・地主派の史家、『ロシア国家史12巻』（1775～1842）の著者カラムジン（1766～1826）をかなり高く評価しているのである。これは以上のことを計算に入れば当然の帰結である。

しかし、ギゾーがチュルヌィシエフスキーを歴史学に誘った人なのである、だから、ギゾーを崇拜者までに持上げこそしなかったが、ギゾーをきらめく知性と見解の、威力ある思想の抜群の論証の持主、チュルヌィシエフスキー自身の意見を全く変更させてしまうほどの全き天才、実践的な人物、真理と法との愛に貫ぬかれた偉人である、と評価されるのもむべなるかなである。なぜなら、ロシアにはギゾーに匹敵する史家はいなかったからである。否、いることはいたが、学生チュルヌィシエフスキーの視界に入らなかった、と言った方が正確であろう。「批判的」歴史学派のカチュエフスキー（1796～1846）、エヴェルス（1781～1830）からも、『モスクワ通信』誌の編集長であり、中産階級がロシアの未来社会の担い手であると主張していた啓蒙ブルジョワ歴史哲学者パレボイ（1796～1846）からも、また、ロシアのす

ぐれた啓蒙主義歴史家グラノフスキー、クリュコフ (1809~1845)、クドリャフツェフ (1816~1858) から、青年チェルヌィシエフスキーは当時学んでいる節は見当らない。彼らは皆きらめくギゾーの背後に隠れてしまったのである。彼が彼ら自国の史家を取り上げて評価するのは、『ロシア文学のゴゴリ時代概要』(1856) や『グラノフスキーの著作についての論評』(1856) や『古典古代論文集、II. レオンチェフ編集』(1855) においてであり、チェルヌィシエフスキーの活動の第二期に当る。ところで、当時のロシアの知的状況を知るためにチェルヌィシエフスキーが最も高く評価したグラノフスキーについて外挿的に若干触れておこう。

1830年代グラノフスキー (1813~1855) はベリンスキー、ゲルツェン、バクーニンらと共にかの有名なスタンケヴィッチ・サークルに属してヘーゲル哲学に一時心酔していたが、40年代ドイツでランケやリッターの講義を聴講して歴史学の方向に転換した。グラノフスキーとスタンケヴィッチ・サークルに接触していたゲルツェンは『過去と思索』のなかで彼の姿をこう描いている、——すべてのものが地面におし倒され、官許の勇しい思想だけが声高に鳴り響いていた時代、また文学は貶められ、学問の代りに奴隷の理論が教授され、検閲官がキリストの格言にさえ首を横にふってクルィロフの寓話を削除していた時代、つまり、ロシアがやっといま抜け出ようとしていたあの重苦しい時代の終り頃、教壇に立ったグラノフスキーを見て、人々は心の軽くなるのを覚えた。グラノフスキーはベリンスキーのように闘士でもなく、バクーニンのような弁証家でもなかった。彼の力はするどい論争や果敢な否定のなかにあったのではなく、肯定的な精神的影響、彼が人の心中にうえつけていた無条件の信頼、芸術的な天稟、むらのないおだやかな魂、その性格の純粹さ、ロシアの現存秩序にたいする、とぎれの深い抗議のなかにあった。彼のことばのみならず、沈黙もまた影響をおよぼしていた、と。ゲルツェンはまた別のところで言う、——グラノフスキーは歴史によって考え、歴史によって学び、そののち歴史によって宣伝した、と。グラノフスキーは40

年代ロシアの最もすぐれた歴史家であり、西欧を賛美する西欧派＝自由主義者に与みし、自国ロシアが西欧より数段立遅れていることを認めて、専制に替えるに立憲君主制をもってし、農奴制に替えるに西欧資本主義路線をもつてした。この意味ではグラノフスキーは、スタンケヴィッチらと共にロシアの啓蒙主義者であり、ブルジョワ民主主義の限界と西欧資本主義の階級的矛盾に気付いていなかった。スタンケヴィッチ・サークル時代のヘーゲル哲学の要素は40年代末まで続き、彼は歴史の実証主義に移ってもヘーゲル歴史哲学のもつ肯定的契機を自らの歴史方法論に組み入れて、事実から出発し、その普遍化が歴史研究であることを認め、事実の中に世界精神の発現をみてとっている。グラノフスキーによると、歴史の目標は道徳的な、啓蒙的な、宿命的諸規定から独立した人格と、この人格に対応した社会の実現でなければならない、また社会は一つの有機体であり、宗教、制度、諸科学、芸術、諸観念は有機体の諸器官に当り、これらの総体の有機的統一が一つの法則に服している、したがってこの素材を統一する法則なり一般的視点を歴史学はもたなければならない。この史観に基づいて、グラノフスキーは、有機的全体としての人民（社会）は対立する多種多様な諸力の闘争から組み立てられていて、この対立する諸力の闘争によって諸人民の生活は発展するものとみた。この点でヘーゲルの歴史哲学がもつ絶対理念の自己完結を否定していて、ギゾーの歴史哲学がもつ歴史における階級闘争の役割の見地も若干みとめられる。ところでチェルヌィシェフスキーはこの自国の歴史家を西欧のギゾー、ティエリ、マコーリー、シュロッサー、ニーブールらとの関係でどう評価したのであろうか。この点を知っておくことはチェルヌィシェフスキーによるギゾー評価を知り、彼の歴史哲学観の荒筋をあらかじめ知るよすがともなる。チェルヌィシェフスキーはグラノフスキーが死んだ翌年の1856年に彼の著作集第1巻について論評を加えた。この論評によれば、グラノフスキーの生きた時代は、40～50年代の時代で、ロシアの学問はいまだ細分化・専門化されていなかったため、グラノフスキーは歴史の専門家というよりはむ

しろ文学にも哲学にも歴史学にも手を染めた、いわば百科全書家であった、そのためモスクワ帝大に職をもつこの学者の任務は歴史部門において独自の学風をつくることでなく、西欧の学問を振り入れて一刻も早く西欧の学問水準にロシアの学界が追いつくことであった。この意味ではグラノフスキーは、ロシア社会と学問との仲介者であり、すぐれたロシアの有数な啓蒙主義者にして当時のロシアの社会生活の要求に見合った思想家であって、歴史の専門分野で西欧のギゾー、ニーブール、シュロツァー、マコーレー、ランケらの大歴史家の比ではないにしても、それなりの役割をもった、とチェルヌィシエフスキーに評される。チェルヌィシエフスキーの見解によれば、本格的な世界史——各国史や政治史の如き歴史でない普遍史——の概念は、ピコ、ボシェー、モンテスキエ、ヘルダーから始まるのではなく、ヘーゲル、ギゾー、ニーブール、シュロツァーから始まるもので、彼らにおいて初めて、歴史は個々の事実の寄せ集めであることを止め、一つの一般的方法に依拠しているか、或は他の諸科学の成果に負うたトータルな人間歴史として把握される。人類の生活は非常に多くの要素の相互浸透から成るから、外的な影響をもつ事件や社会的諸関係の外に、さらにまた科学や芸術の外に、道徳、習慣、家族関係——つまり物質的生活、つまり住居、食物、——これらすべて事物や条件の獲得手段が重きをなしている、よってこれらすべての要素を総体の中で把握するのだからなければならない。このチェルヌィシエフスキーの見解は一部グラノフスキーの見解に依ったものでもある。しかし、チェルヌィシエフスキーによると、従来の歴史は若干の面だけから歴史を構成したもので、例えば戦争その他の事件を述べる政治史であったり、二三の階級だけに限られた文学史や精神史であったりして、人類の生活の総体を把握しているものでなかった。この点でギゾー、シュロツァーにも、ヘーゲルの歴史哲学にも欠陥があり、何よりもまず、生活の物質的側面、人間と自然との関係を度外視してきた。実は生活の物質的諸条件の側面こそ、歴史における第一次的面であって、あらゆる現象やその他の高度の生活領域の根本因を成

しているものである。この見地を踏えた上で、チェルヌィシェフスキーはギゾーの『文明史』について評価を下す、——歴史は「政治史、教会史、法制史、哲学史である」というギゾーの見地は、人民生活の知的生活を第一次の側面とみなしている証拠であって、ここでは生活の物質的側面が無視されている、ギゾー自身は歴史を「人間の内的生活と人間の他の人間との関係」にのみ限ぎっていて、人間と自然との関係には言及していない、と。ところで、自然の中に人間生活の源泉があり、全生活は根本的に自然との諸関係によって規定されているというこのチェルヌィシェフスキーの見解には、フォイエルバッハの唯物論がはっきりと見受けられる。チェルヌィシェフスキーによると、グラノフスキーはまず歴史学と自然科学（人類学等を含む）の諸成果との連合を試み、人間生活の自然的面を歴史学にとり入れる企てをした。グラノフスキーは、歴史学が「学問のための学問」ではなく人間の生活の学問であり、人間の精神のおよび生活的、知的および物質的諸要求を満足させ、生活に影響をもたらすもの、人間に役立つものであるという歴史学的見地に立ったロシアの最初の人であった、と評される。グラノフスキーが革命的民主主義者チェルヌィシェフスキーによってなによりもまずすぐれた思想家と評されるのは、ギゾー、シュロツァー、ランケ、マコーリーらによって始められた普遍史の観念を引き継ぎ、彼らのもつ政治史、文学史等々の一面性を脱却し、人民生活の政治的および知的諸要素に自然的要素を結びつけた点にある。グラノフスキーは従来の学問の境界を拡大し、歴史学が自己の殻にとじこまらないで、他の学問と接触させようと企てた、この点にこそ、ギゾー、シュロツァーにまさるとも劣さないグラノフスキーの役割を第二期の唯物論者チェルヌィシェフスキーは見たのである。

ともあれ、学生時代のチェルヌィシェフスキーは『イギリス革命史』を四度も読み直すほどのギゾーへの熱中ぶりであった。チェルヌィシェフスキーは、確かに、前述したように絶対君主権と人民主権との間を動揺したが、し

かし、国家が人民に属さず、法、真理、善、イデオロギーに属するとするギゾーは間違っている、と論難する時がまもなくチェルヌィシエフスキーを訪れるのである。このギゾーの理性主権の批判にあずかって力あったのは、またもや西欧の事件なのである。それはフランスの2月革命がベルリン、ウィーン、プラハ等のロシアに近い諸国に波及した時の、各人民の蜂起である。

周知のように、フランスの2月革命に導火線を結んでいたドイツ3月革命は、ヨーロッパ保守・反動の牙城たるウィーン体制の一角を壊し、メッテルニヒを追放し、一応検閲制度の廃止、出版の自由、自由主義憲法、民主的代議制を獲得する成果を取めた。革命の勝利のさなかにかの有名なフランクフルト議会が召集されるが、その構成は大土地所有者、大ブルジョワ、圧倒的多数の知識人と小ブルジョワであって、最初から君主立憲派、共和的民主派、穏健派、急進派、大ドイツ主義、小ドイツ主義といった具合に各種の利害がいきまじり、相互に矛盾対立をして一つの統一的方向をもっていなかった。それでも憲法とドイツ国の統一を議題に1848年5月18日に議会は開会したが、この国民議会はエンゲルスによって「議会的白痴病」と名付けられたように、専らおしゃべりに終始し行動力と決定力に欠け、まもなく一事もなさぬうちに多数派のブルジョワ自由主義派が、少数派の急進左派を抑えて、反動に傾きかける始末となってしまう。例えば、ウィーンの反革命に対しては議会は急進派議員ロベルト・ブルム(1808~1848)を現地に派遣させるが、バリケード戦に参加したかどで彼が軍事裁判にかけられて銃殺させるにまかせたり、ポーランドの独立運動に加担もできなかつたり、デンマークと屈辱的な休戦条約に甘んじたり、更にはプラハの暴動の鎮圧に力を貸したり、11月のベルリンの反革命にはこれといった手を打っていなかつたり、といった無様ぶりを示した。これらの中のいくつかのことをチェルヌィシエフスキーは“*Illustr. Zeitung*”で知り、フランクフルト議会が反革命勢力に力を貸すに至った1848年11月に次のように日記にしている、——フランクフルト議会の無行動と無決定は氣にくわぬ、こう理解できよう——人民の意

思に由来して、政府の意思に反対しているのだから、もし自らに死刑の判決を下したくないなら、政府に抵抗して人民と共に立ちあがるべきだ、良心からしたってこうすべきであろうに。今人民を不法にあつかうなら、この議会を存続させている議会の諸行動も不法となる。プロイセンや特にオーストリアの事件で、イエスでもない、ノーでもない、一体何んなのか？ 私見によれば、全権委員が派遣されるなら、彼らの同意なしでは何一つなしえないという前提に立っての上だ。一口で言えば、左派が要求するように動くこと、これは自分を傷つけない。すべての人に合致する細心さ……プロイセン政府は卑怯者だ、オーストリア政府も卑劣漢だ、彼らにとって使命というものはこれぼっちもない、ブルムの殺害者にたいする憎悪は筆舌に尽しがたい、と。ブルムの銃殺はチェルヌィシェフスキーに相当大きな衝撃を与え、長いこと彼の念頭を離れていない。1848年10月5日オーストリアのウィーンで、ハンガリア独立軍と人民が皇帝軍と戦闘をまじえ、3週間のバリケード戦を行ったが、ウィーンはヴィンディッシェ＝グレーツの率いる皇帝軍によって包囲され、市民軍は降伏した。このハンガリアの蜂起はブルジョワジーの裏切り行為と急進的民主主義者の動揺のために敗北を喫したものであったが、この時、フランクフルト国民議会から急進派議員ロベルト・ブルムがウィーンに派遣されたが、派遣議員の不可侵性にもかかわらず軍事裁判にかけられ銃殺されてしまった。チェルヌィシェフスキーは義憤を禁じえなかった、——ヨーロッパは、専制政治が諸形式を破壊するにまかせる時代に接近しつつある、彼の許可もなしに、議員を銃殺するとは、ロシアの皇帝ニコライ I 世は「ヨーロッパの憲兵」の資格と自負によって蜂起の鎮圧者ヴィンディッシェ＝グレーツに勲章を授与した。このことに対してチェルヌィシェフスキーは、フランクフルト議会在が決断力をもっていなかったがためヴィンディッシェ＝グレーツが裁判にもかけられずに放置されたのであるとして、当然ヴィンディッシェ＝グレーツを絞首台ものにすべきだとの呪詛を投げかけている、他方ブルムに対しては冥福を祈った。それと共にチェルヌィシェ

フスキーの以前のテロリスト的感情が再度たかぶりを示し、フランス大革命当時ダントンと共に死刑に処せられた国民公会の議員 Chabot シャボ (1759~1794) の呪咀、「予を殺害したまえ、予の死体を反動どもに投げつけたまえ、人民が彼らに抗して蜂起するために！」を引き合に出して、自らはロシアのために身を挺して戦うことを日記の中で自己宣言している、——心の底から、おれは自分の信念の勝利のために、自由・平等、同胞と満足の勝を占めるために、貧困と罪惡の根絶のために、自分の生命は少しも高価なものとは思わない。もしおれの信念が正当であり、勝利を収めることができると確信さえできれば、そして信念が勝利を請負ってくれさえすれば、かちどきあげる日をおの眼で見るのがなくても、悲しみはしない。そしていさぎよく死ぬるであろう。このことをひたすら信じておれば、苦しいことはない、と。

こうして、チェルヌィシェフスキーの無制限君主制とギゾーの理性主権に由来していた政治観の動揺は、ブルムの事件を契機として取り除かれ、人民主権 (souveraineté du peuple) の方向へと彼の政治観は強く固まり始めたのである。この方向を強めたものは、フーリエの『四運動』とフォイエルバッハの『キリスト教の本質』とペトラシエフスキー事件であった。

=つづく=

使用テキスト

Н. Г. Чернышевский: Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах, Дополнительный том, 1939~1953.
Государственное издательство художественной литературы, Москва.